戦時宰相・東條英機による太平洋戦争下のメディアパフォーマンスとその手法

小松崎鉄雄

序論
第一章　大衆政治家としての東條
第二章　国民を統率する戦争指導者としての東條
第三章　東南アジア外交で求心力回復を目論む東條
結論

序論

昭和 16（1941）年 12 月 8 日の真珠湾攻撃をきっかけに日本は対米英戦争に踏み切り、アジア太平洋を舞台に約 3 年 8 ヵ月にわたる総力戦が繰り広げられたが、その約 2 ヶ月前の 10 月 18 日、現役の陸軍大将として第 40 代内閣総理大臣に就任したのが東條英機であり、約 2 年 9 か月余り、軍人宰相として政権運営を担った。本論文は、東條内閣をめぐるメディア報道を分析することで、当時の東條によるメディアパフォーマンスがどのようにして行われていたのかを明らかにするものである。

現代では、東條英機と聞けば戦時日本の首相として名前を知らない人は少ない。日本では日米開戦を主導した中心人物として今日に至るまで強く語り継がれており、世界でも、ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニと並び、日本の代表的な戦争指導者として世に知れ渡っている。しかし、日本の敗戦を招いた政治指導者であったことや、A 級戦犯として処刑されたこと、さらには、対米強硬論を唱えた陸軍の出身であったことが影響し、戦後、映画・小説や学術的な歴史研究を通じて負のイメージが増幅された。その結果、今日に至るまで、悪名高き戦争指導者として日本人の記憶の奥底に強く残り続けている。戦後 70 年を過ぎた今でも、その負のイメージが深く根付いていることは新たな東條像の確立を阻害している大きな要因にもなっている。

しかし、東條の首相就任時から内閣総辞職までを扱ったメディア報道を追っていくと、現代のイメージとはかけ離れた東條が当時のマスメディアを通して描かれており、メディアを巧みに駆使しながら戦争指導を担う東條の新たな一面が垣間見ることができるのではなかろうか。以上の点について、これまでの既存研究では、東條のメディアパフォーマンスを断片的に取り上げたものはあるが[1]、総理大臣在任期間中のメディアパフォーマンスを網羅的に研究したものは管見の限り、見当たらない。

そこで本論文では、東條に関するメディア報道を分析すると同時に、それが戦局の悪化に伴ってどのような変容を遂げたのか、以下の手順に沿って明らかにしていきたい。

第一章では、東條内閣組閣時から昭和 18（1943）年中盤までのメディア報道が国民に印象づけようとした、大衆政治家としての東條の姿、続く第二章では、国民を統率する戦争指導者としての東條の姿

[1] 東條に関する既存研究を挙げると、東條英機刊行会・上法快男編『東條英機』芙蓉書房、昭和 49 年、保坂正康『東條英機と天皇の時代』（筑摩書房、昭和 54 年～昭和 55 年）、古川隆久『東條英機　太平洋戦争を始めた軍人宰相』（山川出版社、平成 21 年）などがある。また、東條とメディアとの関係については、川村邦光『聖戦のイコノグラフィ：天皇と兵士・戦死者の図像・表像』（平成 19 年、青弓社）が「東條さん」の名で国民と親しく接するメディアパフォーマンスについて言及している。

を浮き彫りにし、第三章では、昭和 18 年中盤～昭和 19（1944）年 7 月の内閣総辞職に至るメディア報道を分析し、戦局の悪化によって東條のメディア演出にどのような変化が見られたのかを明らかにしたい。

第一章　大衆政治家としての東條

首相在任中の東條は、陸軍大臣時代に広く浸透していた「剃刀大臣」・「電撃大臣」の異名を持つエリート軍人宰相というイメージとは裏腹に、当時の新聞メディアからは親しみを込めて「東條さん」、「国民の父」と呼ばれ、その愛称で国民からも親しまれていた。本章では、首相就任時の昭和 16 年 10 月頃から昭和 18 年 3 月頃までのメディア報道を分析し、広く国民に浸透させようとした東條の大衆政治家的な一面を明らかにしていきたい。

メディアが「東條さん」を初めて捉えたのは、内閣誕生の直後に東條が街に繰り出し、一般大衆と親しく接している時である。『写真週報』（昭和 16 年 11 月 12 日、194 号）と『朝日新聞』（昭和 16 年 10 月 24 日）では、ニッコリ笑いながら児童に頭を下げる馬上の東條と、思いがけぬ東條の激励に感極まり万歳を唱え続ける児童の姿が描写されている（図 1 参照）[2]。首相としての認知度が低く、印象が薄かった当初から、親しみやすさを存分にアピールしている東條と日本の首相を間近に拝めたことに興奮する国民の様子が見受けられるだろう。もちろん、馬上から児童を見下ろす光景は親しみやすさのアピールとしては問題が残るものの、東條としては、国民の生活に果敢に溶け込み、「剃刀大臣」という固いイメージを払拭させたかったのである。

こうして東條は首相としてメディアデビューを果たしたが、以後、大衆政治家としてどのようなイメージを国民に浸透させようとしたのであろうか。

第一に、様々なタイプの庶民と接点を持とうと奔走する精力的な政治家のイメージである。国民と親しく接することに精力的な東條は全国各地を飛び回り、ある時は視察先の福岡で作業服を身にまとった東條が炭鉱戦士に優しく声をかけ[3]、また、ある時は背広姿で茨城の日輪兵舎訓練所に赴き、一人一人に丁寧な慰問の言葉をかけた[4]。東西南北縦横無尽に駆け巡り、奈良で兵の射撃練習を自ら指導したかと思えば[5]、神職の会合にも飛び入り参加で激励を飛ばす神出鬼没ぶりである[6]。出向いた先々では、出会った庶民と親しげに会話し、国民生活の実情を汲み取ることにも余念がないその姿は、まさに、「大衆散歩を行う昭和の水戸黄門」と称され[7]、国民にとって待ちに待った大衆首相としてメディアに取り上げられたのである（図 2–5 参照）[8]

第二に、庶民に対して気取らない政治家のイメージである。例えば、東條が首相官邸に庶民を招き入

---

[2]「東條さん　朝に乗馬に“親切”実践」（『朝日新聞』昭和 16 年 10 月 24 日）では、「オーイ、オーイ」と呼び止める馬上の東條が少国民にニッコリ笑いながら丁寧に頭を下げる様子が描かれている。

[3]「地下千二百尺の東條さん」（『朝日新聞』昭和 17 年 3 月 31 日）

[4]「東條さん・日輪兵舎へ　鍬の戦士に“農村”を聴く」（『朝日新聞』昭和 17 年 12 月 30 日）

[5]「東條さん暁の奈良で民情視察　日曜日くらいは朝風呂を　兵の射撃演習を自ら指導」（『朝日新聞』昭和 17 年 8 月 23 日）

[6]「東條さん飛入り　神職の会合に激励の辞」（『朝日新聞』昭和 17 年 11 月 11 日）

[7]「五十八ぢゃまだ若い　職業戦士を励ます東條さん　帰路にお米屋も奇襲」（『朝日新聞』昭和 17 年 6 月 12 日）。

[8] 近藤日出造「奇襲する東條さん」（『時局雑誌』昭和 17 年 8 月、8 月号）101 頁では、「庶民は、へへーッと心から平伏の出来る為政者をほしがっており、偉いお方の素顔を拝んで有り難がりたいのだ。もし、東條さんが昭和の水戸黄門だとしたら、こんな素晴らしいことはないではないか。」と記載されている。

れ、歓待のもてなしをした記事を見てみよう。東條は岩手郷土選士や群馬郡少国民幹部といった国内の若人はさることながら[9]、満州国大同学院生や朝鮮農業報国隊などの植民地で従事する若人たちも積極的に招き入れており、お茶やお茶菓子を振る舞いながら慈顔を和らげて労ったのである[10]。記事ではそうした東條のふるまいを「慈愛に満ちている」と報じ、一人一人に慈しみの眼を注ぎながら労う東條の温かいもてなしに深く感激する庶民の姿が描かれている[11]。以上の記事内容からもわかるように、東條は首相官邸でさえも庶民との交流場所の一つとして位置づけ、数々の来訪に対する歓待を通じて、気さくなイメージを日本中の国民に植え付けることとなり、「人情味あふれる首相」として国民に認知してもらうよう仕向けたのである（図 6–7 参照）

第三に、庶民の苦労に報いる情の深い政治家のイメージである。例えば、「まァ首相から腰掛　子供は大好き！と東條さん」（『朝日新聞』昭和 17 年 11 月 5 日）では、作業をする女学生を優しく励ましてきた東條が、ある日、セメントのベンチ・ブランコ・鉄棒を女学校に寄贈し、すぐさま東條首相からの贈り物だと気づいた女学生から“優しいお父さま”に対して感謝を述べたというエピソードが綴られており[12]、東條による優しい計らいに“親心”を感じとった女学生が、庶民を第一に気遣うその姿に“優しい父親”を重ね合わせている様子を窺う記事となっている。また、同時期に『写真週報』（1942 年 9 月 2 日 236 号 18-19 頁）に掲載された記事も親心に溢れる東條の様子が描かれている。この記事は、東條発案の航空郵便が如何に非常な人気を博し、そして国民が感謝と感激に満ちているのかを表現してあり、その功績を東條の“親心”によるものとして絶賛している（図 8 参照）[13]。それ以外にも、マニラ学童への教科書贈与や[14]、内務省勤務の給仕への手厚い賞与など[15]、まるで子供を心配する父親のように“温かみ”のある計らいを振りまいており、現在のイメージである軍人・東條からは想像がつかないほど人間的で情に厚く、国民のすぐそばに寄り添う姿が繰り返し伝えられた。

第四に、庶民を思いやる一方で、自らに厳しい政治家のイメージである。東條が多忙であるにもかかわらず様々な場所に視察に訪れ、「就寝十一時、起床四時半、しかも絶えず活動して少しも休まない首相」の姿を「滅私奉公」、「垂範実行」と褒め称え[16]、「至誠努力」という言葉を用いながら、自らを律しながら庶民を第一に考える誠実な政治家であることをアピールしたのである。

第五に、社会的弱者を大切にし、彼らからも慕われている政治家のイメージである。東條は、児童の

---

[9]「東條さん激励の餞け　郷土選士迎えて感激のひと時」（『朝日新聞』昭和 17 年 10 月 30 日）、「東條さん群馬の若人激励」（『朝日新聞』昭和 18 年 2 月 23 日）

[10]「君らは東亜の挺身隊」（『朝日新聞』昭和 17 年 11 月 18 日）、「生かせ内地で鍛えた腕」（『朝日新聞』昭和 17 年 7 月 7 日）

[11]「肩を叩き若人激励　“多忙”に勝ち抜く東條さん」（『朝日新聞』昭和 17 年 12 月 10 日）

[12]　前掲、「まァ首相から腰掛　子供は大好き！と東條さん」。

[13]『写真週報』（236 号、1942 年 9 月 2 日）18-19 頁
政府刊行雑誌である側面上、この記事は『朝日新聞』よりも強いメディアパフォーマンスが目立ち、新しく開通した南方の前線で活動する兵と銃後の家族を結ぶ航空郵便を「兵隊さんと家族のこの気持ちを汲んだ東條総理が自ら率先主唱し、軍と逓信省との密接な協力によって実行に移されたもの」だと紹介し、東條自身による計らいであることを強調している。その他にも、一般大衆からの感謝状を全文掲載して紹介し、その横には手紙を受け取り喜ぶ子供の写真を掲載することで、東條による思いやりが如何に大衆を喜ばせているかを強く訴えている。

[14]「“東條さんと学童”」（『朝日新聞』昭和 17 年 3 月 3 日）

[15]「五十割に微笑む給仕　東條内相・下に手厚い親心の賞與」（『朝日新聞』昭和 16 年 12 月 7 日）

[16] 菱山辰一「首相東條英機」（『経国』昭和 18 年 5 月、10 号）、170-171 頁。「垂範実行」とは、例えば、東條が国民に対して「親切であれ」と発言したら、東條自らが率先して親切に対応することであり、（「東條さん　朝に乗馬に“親切”実践」『朝日新聞』昭和 16 年 10 月 24 日）、国民に節制を求める際には「貧乏旅行」と称した自らの倹約術を披露したのはその一例である（尾関岩二『枢軸の偉人』文祥堂、21 頁）

朗読には思わず「ほろりとしてかわいくてたまらないような優しい眼差しを子供達に贈る」程の子供好きとして紹介されるほど[17]、子供をかわいがる政治家として描かれている。子供向けに演説する時も、獅子吼する演説とはうってかわってくだけた口調で子供に語り掛け[18]、わざわざ壇上から降りて児童と同じ目線で万歳三唱を行う点からも児童への細かい配慮も忘れないことが見てとれる[19]。こうした児童へのメディアパフォーマンスは、多様な児童雑誌を駆使した東條の手厚いメディア戦略からも覗い知ることができる。当時、支那事変四周年や大東亜戦争一周年の節目に、国民の士気高揚を目的とする寄稿文が『少年倶楽部』・『少女倶楽部』といった児童雑誌でも掲載されており、例えば、大東亜戦争一周年の際に寄稿文が掲載された 10 誌のうち児童雑誌が 6 誌を占めたことからも[20]、児童雑誌における東條の露出ぶりがわかる（図 9 参照）

一方、メディアでは、児童達の間で人気があることを様々な形で伝えている。一例として、「僕たちの学校に東條さんが来たんだぜ」（『東京朝日新聞』昭和 17 年 3 月 1 日）の記事を紹介すると[21]、身分を隠して突然学校に訪れた東條による「孫を愛撫するお祖父さんの寛容を示した真情のこもった視察」に感激の嵐がやまない児童の様子がありありと描かれており、東條人気が子供たちにまで浸透していることをアピールした紙面となっている。他にも、一目見ようと首相官邸に押しかける女学生[22]、「いつも我々の為に働いて下さる東條さんへ」と学校菜園で収穫されたキャベツを贈る学童[23]、「全国から集まった児童 300 余名とともに万歳を奏唱する東條さん」のように[24]、東條が子供達からも慕われていることを国民に広く知らしめたのである （図 10–11 参照）

また、子供だけでなく、戦死者の増加と戦局の悪化に伴い、戦争で父親を亡くした遺児にも気を配る東條の姿も報じられており、例えば、田邊至書「靖国の子と共に」（小田俊興著『戦ふ東條首相』昭和 18 年、博文館、22-23 頁）には、朝の散歩の帰り道の遭遇した子供と手を繋ぎ、朗らか表情で歩く東條の姿が描かれている[25]。他にも、遺児が具合を悪そうにしていれば、馬を飛ばしてそのもとへ駆けつけて優しく看病する姿[26]、軍人遺族職業補導所落成式に出席していた遺児たちに優しく労り頭をなでる父

---

17 「まァ首相から腰掛　子供は大好き！と東條さん」（『朝日新聞』昭和 17 年 11 月 5 日）
「闘いを誓う少国民に東條さん感激の瞳」（『朝日新聞』昭和 17 年 12 月 24 日）

18 「身も心も日本一　東條さん健康児を諭す」（『朝日新聞』昭和 17 年 6 月 27 日）

19 「臺を降りて君が代合唱　東條さん全国学童代表に訓示」（『朝日新聞』昭和 17 年 9 月 23 日）

20 大東亜戦争一周年を迎えた昭和 17 年 2 月、数多くの児童雑誌が東條首相からの寄稿文を掲載しており、例えば、「大東亜戦争一周年ニ際シテ」（『少女之友』昭和 17 年 12 月号）26-27 頁、「大東亜戦争一周年ニ際シテ　少国民ノ方タチニ」（『少女倶楽部』昭和 17 年 2 月）34 頁、「少国民ノ方タチニ　大東亜戦争一周年ニ際シテ」（『海洋少年』）6-7 頁、「大東亜戦争一周年ニ際シテ　少国民ノ方タチニ」（『航空少年』昭和 17 年 12 月）22-23 頁、「大東亜戦争一周年ヲムカエルニアタッテ　少国民ノミナサンヘ」（『幼年倶楽部』昭和 17 年 12 月）92-93 頁、「大東亜戦争一周年ヲムカエルニアタッテ　少国民ノミナサンヘ」（『子供之友』）などがある。また、小田俊興『戦ふ東條首相』（博文館、昭和 18 年）は、主に、東條英機に関するエピソードを挿絵付きで描写している児童向けの挿絵集であるが、中には、宣戦大詔時の玉音放送や東條英機自身をモチーフにした詩・曲も含まれており、メディア戦略において文字のみに留まらない様々な幼年代向けの工夫が施されている。

21 「僕たちの学校に東條さんが来たんだぜ」（『東京朝日新聞』昭和 17 年 3 月 1 日）では、“国民学校の感激編”と銘打ち、ある国民学校が東條首相来訪の誠意に応えて毎月二十一日を東條記念日と定めたことを大々的に報道している。

22「東條さんと女学生のひと時」（『朝日新聞』昭和 17 年 6 月 18 日）

23「有難う、丹精のキャベツ　東條さんご満悦」（『朝日新聞』昭和 17 年 6 月 5 日）

24「臺を降りて君が代合唱　東條さん全国学童代表に訓示」（『朝日新聞』昭和 17 年 9 月 23 日）

25 田邊至書「靖国の子と共に」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、22-23 頁

26「東條さん　馬上から視閲」（『朝日新聞』昭和 17 年 3 月 28 日）

親のようなふるまい[27]、扶助料（戦死された兵の遺族に対する補助金のこと）をまだもらっていないという遺児からの問いかけに「それはいけない」とすぐさま手帳に書き起こし、服部秘書官に調査を命じる機敏な対応など[28]、そうした慈父の如き東條の思いやりについて記した記事が数多く登場し（図 12－13 参照）、それに加えて、東條のふるまいに頬を濡らして感激する遺児が多いことについても言及したのである[29]。

以上のように、東條は、誰とでも分け隔てなく交流し、庶民の苦しみにも敏感な大衆政治家としてのイメージを浸透させたが[30]、首相だけでなく、陸相、時期によっては内相を兼任し、多忙を極めていたにもかかわらず、これほどまで熱心だったのは、陸軍時代の成功体験が影響しているからである。

陸軍連隊長だった頃から、東條は「軍隊は所謂一大家族主義で連隊長は父であり、中隊長は母であり、兵卒は子供である」と主張している通り[31]、一部隊を家族と見立て、自らを父、兵を子として愛情を注ぎ、部下の信頼を獲得してきたが[32]、その考えは、第二次近衛内閣の陸相として取り組んだ健兵対策でも生かされていた。当時、入営する兵員の健康状態は年々悪化の一途を辿り、入営後、陸軍病院に入院する兵が毎年六万数千人に達した。特に満州では、胸部疾患のため除隊せねばならぬ兵たちは数千名にも及び[33]、病人を多く作った部隊はたとえ訓練ができても軍隊とは呼ばれなかった[34]。そこで、東條は連隊長時代のことを思い出し、猛烈な訓練や演習をやるときは、熱中症予防や睡眠、食事の有無など、微に入り細に亘って分隊長や兵ごとに熟知するよう徹底させ[35]、一定の成果を収めたのである。

そうした陸軍時代の経験を踏まえ、首相となった東條は、読み書きもおぼつかない子供から銃後で日本を守る婦人まで、実に多様な民衆をまとめあげるため、陸軍時代において兵士を「子」として細かいところまで気を配ったように、東條は自らを「父」、一般国民を「子」と位置づけ[36]、「父」が「子」をいたわるように、親身になって国民に寄り添おうとメディアに露出し続けた[37]。「人はよく自分のことを、

---

[27]「英霊に応えよ」（『朝日新聞』昭和 18 年 3 月 7 日）では、軍人遺族職業補導所落成式に出席していた遺児たちを優しく労り頭をなでる東條が描かれている。

[28]「東條さん慈父の心遣い」（『朝日新聞』昭和 18 年 3 月 27 日）

[29] 『写真週報』（昭和 18 年 4 月 7 日、266 号）、3 頁

[30] 東條の大衆散歩を「お芝居気だ」と揶揄するべきではないと擁護する論調があることから、少なくとも東條の「大衆政治家像」は国民に広く認知されていたといえるだろう（前掲、近藤「奇襲する東條さん」）。

[31] 近藤保雄『偉人と英傑立志伝』（日本精神社、昭和 17 年）、42-43 頁

[32] 東條の下級兵に対する愛情の深さを象徴するエピソードは多分に存在するが、例えば、後の東條秘書官となる赤松貞雄が陸大受験に失敗し落ち込んだ時、わざわざ赤松の自宅に訪れた東條は彼を散歩に連れ出すと、「おれもなあ、陸大をうけるとき体が弱くて、日赤の病院長なんかこれ以上勉強すると生命がもたないと忠告してくれたんだが、陸士時代成績が良くなかった。どうしても陸大にはいらなければならないと思って、頑張ったのだよ。君も頑張らねば駄目だ。」と激励の言葉をかけた。他にも、赤松の後輩が花柳病に罹患したと知るや否や、自分の知人の医者に懇々とお願いし、当時ではまだ珍しい自動車を呼ぶとすぐさま治療ができる入院施設を紹介するなど、親身になって下級兵をいたわった。また、下級兵が退役する際には再就職を斡旋し、隊長と兵士という枠組みを超えて下級兵を「子」のように接しており、そうした軍隊での経験から「一大家族主義」という東條の考え方が生まれたのである（赤松貞雄『東條秘書官機密日記』〈文藝春秋、昭和 60 年〉）。

[33] 前掲、近藤『偉人と英傑立志伝』15 頁

[34] 同上。

[35] 同上、257 頁

[36] 東條は自らと国民との関係を親子関係に準えていたが、外交評論家・清澤洌の目には東條が国民を「一歩下の被統治階級」として扱っているようにしか見えなかったようである（『暗黒日記』昭和 19 年 1 月 4 日）

[37] 東條は、親身になって国民に寄り添う姿勢を行政にも強く求めている。『実業之日本』では「今や我国の労資関係は単なる金銭づくの雇用契約ではない。日本獲得の一大家族主義が経営の中に織り込まれなければならない」と謳われており、内政を担当する者は親心を持って行政にあたるよう訴えた（東條英機「国家総力の結晶」〈『実業の日本』、実業之日本社、46 号、昭和 18 年 1 月〉）。地方の官僚に対しても「内線の第一線

政治家として云々というようだが、自分は政治家といわれることは大嫌いである。戦術家といわれるならばともかく、ちっとも戦術家ではない。ただ、多年陸軍で体得した戦略の方式をそのまま実行しているだけなのだ」という東條の発言が物語るように[38]、首相となった彼は陸軍時代における成功体験を国民の人心掌握のために利用したのである。

以上、本章では、東條が首相就任後、国民に広く浸透させようとした「大衆政治家像」について論じ、陸軍時代の成功体験を生かし、庶民に親しまれ、その生活を誰よりも親身になって理解してくれる指導者であることを印象づけたことを明らかにした。

第二章　国民を統率する戦争指導者としての東條

東條による大衆政治家的パフォーマンスについては前章で明らかになったが、同時期の報道を見ていくと、それとは正反対といっても過言ではない、別の東條像が浮かび上がってくる。それは、勇猛果敢でリーダーシップに満ち溢れる軍人宰相としての東條であり、陸軍大将で陸軍大臣を兼任している東條本来の姿と言えよう。そこで、本章では、第一章と同様、昭和 16 年 10 月頃から昭和 18 年 3 月頃までのメディア報道を分析し、戦時の指導者として東條がどのように描かれていたのかを明らかにしたい。

首相就任当初、『経済マガジン』12 月号では、数多くの勲章をぶら下げた軍服に身を包んだ東條を「飽くまで実行型」であると述べ[39]、彼の実行力と行動力を称賛すると同時に対米戦争という非常事態の克服に多大なる期待を向けた。まさに「これまでに数々の功績を挙げた軍人首相」としてのイメージを抱かせるには十分であり、自らを「リーダーシップに溢れる雄々しい軍人指導者」であることを印象づける最初の報道となった（図 14 参照）[40]。その後、よく頻繁に紙面に登場するのが、軍服姿の東條が馬上から敬礼する姿である[41]。皇軍の香港入城式といった公式な場のみならず[42]、神社で戯れる児童への激励や急病人の遺児のもとに駆けつける際にも馬に乗って登場し[43]、さらには絵本や刺繍の挿絵にも国民と仲睦まじく会話する馬上の東條が描かれるなど[44]、公式な参列のみならず、挿絵にまで「馬上の東條」

に起てる諸君は眞に国民の立場に身を置いて、親子兄弟の身になって行政に当たってもらいたい」と呼びかけ（東條英機「大戦下の官吏服務三原則」『警察協会雑誌』、警察協会、505 号、昭和 17 年 6 月）、親心ある行政の重要性を強調したのである。

38 前掲、近藤『偉人と英傑立志伝』、99 頁

39 「飽くまで実行型」（『経済マガジン』、昭和 16 年 12 月）、3 頁。同記事では、東條が「超非常時克服の爲宰相として登場したことは、極めて新鮮な印象を国民に与え、多大の期待を抱かれている」と述べた上で、「願わくばその実行力に物をいわせて、敢然皇国の大路を開拓して貰いたい」と東條への期待感をあらわにした。

40 「大東亜戦争一周年」（『写真週報』249 号、昭和 17 年 12 月 2 日）の表紙でも、称えんばかりの数え切れぬ量のバッジを胸に軍服を纏った東條のピンショットが掲載されている。

41 『写真週報』（215 号、昭和 17 年 4 月 8 日）1 頁

42 「皇軍香港へ堂々の入城式」（『アサヒグラフに見る昭和の世相 4』、朝日新聞社、1977 年）、263 頁

43 「東條さん　朝に乗馬に“親切”実践」（『朝日新聞』昭和 16 年 10 月 24 日）では、「オーイ、オーイ」と呼び止める馬上の東條が、少国民にニッコリ笑いながら丁寧に頭を下げる様子が描かれており、思いがけぬ東條の激励に感極まり、馬を返す大将の姿が見えなくなるまで万歳と立ち止まり見送る児童が描写されている。「魚河岸へ首相の奇襲」（『朝日新聞』昭和 16 年 10 月 30 日）、「ほまれの子たちを励ます東條首相」（『少年倶楽部』昭和 17 年 5 月、29 号、）123 頁、三上智治「敬神」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、10-11 頁、「東條さん　馬上から視察」（『朝日新聞』昭和 17 年 3 月 28 日）でも同様に馬に乗った東條が描写されている

44 北原白秋「東條さん」（『大東亜戦争　少国民詩集』、朝日新聞社、昭和 18 年）では、町中に突如姿を現わした馬上の東條と国民との仲睦まじい情景を想い浮かばせる詩であり、「ゲエトル宰相気楽だな」・「みんなの宰相ほがらかだ」といった親しみやすいフレーズを多用している。多々羅義雄「春の会話」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、14-15 頁でも、絵では紳士服に身を包んだ東條が、気づいた時には、もう颯爽と愛馬に跨る姿が描かれている。

が姿を現す（図 15–16 参照）。陸軍大将として自らを誇示する姿勢が覗えるほか、自らを政治家でないと揶揄する一方で、陸軍エリートとして一般庶民と明確に一線を引いている自尊心の高さが表れているといえよう。

以上のように、視覚に訴える形で戦争指導者としての雄々しい姿をアピールしたが、それに加え、議会での演説や答弁などで東條が熱弁をふるう場面を通じて、東條に国民を統率する指導者としてのカリスマ性があることを暗に示した。首相に就任してわずか一週間後、議会の承認を待たずして臨時議会招集を断行した東條の行動を「鉄石の決意」と表現した報道が口火を切ると[45]、日米開戦までに徐々に大きくなりながら、壇上で力強く演説を行う東條の姿が「烈火の如く」や「獅子吼する」といった力強い言葉と共に大々的に取り上げられ、米英を打倒せんとする熱き闘志と不屈の信念が備わっていることを読者に印象づけた。また、『朝日新聞』（昭和 16 年 11 月 18 日）でも、東條の演説が「よほどの名演説でも拍手の沸かぬが常である貴族院を」万歳にどよめかせ[46]、議会の場においても戦時のリーダー・東條の手腕が遺憾なく発揮されている印象を与えるなど、東條による衆議院本会議開会時の演説を「鉄石の言葉をもった歴史的な演説」と表現し[47]、「一節毎拍手が巻き起こる」程の名演説ぶりを紙面一杯にアピールした[48]。

日米開戦後は壇上で演説する東條だけでなく、東條演説に耳を傾ける聴衆にも焦点が当てられ、その熱狂ぶりが東條のカリスマ性を際立たせた。例えば、「“東條さん萬歳”大阪で大群衆が熱狂の嵐」（『朝日新聞』昭和 17 年 7 月 28 日）は大阪で行われた大東亜戦争完遂国民総力結集大講演会の様子を文字に起こしたもので、警備の必死の静止もむなしくあっという間に東條を取り囲む聴衆、東條に握手された手を離さずに 20 メートルも車と並走する少年少女、一町もの距離を東條が乗った車の後を追って万歳三唱する群衆など[49]、その記事からは東條首相の凄まじい人気に騒然とした会場の状況やもはや収拾がつかないほどの熱狂ぶりがひしひしと伝わる（図 17 参照）。さらに、「首相の声に一億呼応」（『朝日新聞』昭和 16 年 11 月 18 日）では、「首相の舌端に世界の固唾　敵性抉る鉄石の言葉」という大きな見出しで「東條の一句一句力強い演説録音放送に思わず国民一人一人が手を取り合う」様子が掲載され、東條演説に心打たれる民衆の姿が文面上からでも強く受け取れる紙面構成となっている。このように戦争指導者・東條は、演説時や衆議院本会議答弁時といったオフィシャルな場面で多く散見され、各メディアはその様を「強い意志と自信に満ちあふれた東條」と「熱烈な眼差しと満場の拍手をもって東條を称える聴衆」の双方から“勇猛果敢で皆を先導するカリスマ的リーダー”であることを国民に印象づけた。「獅子吼する」といった決まり文句を多用する場合が多く[50]、観衆の胸を突き刺すような力強さと熱を持つ東條の名演説ぶりからは、第一章で描いた「大衆政治家像」とは対照的な「カリスマ性に満ちあふれた戦

45「鉄石の決意を示現」（『朝日新聞』昭和 16 年 10 月 25 日）

46「首相の舌端に世界の固唾　敵性抉る鉄石の言葉」（『朝日新聞』昭和 16 年 11 月 18 日）

47　前傾、「首相の舌端に世界の固唾　敵性抉る鉄石の言葉」では、衆議院本会議開幕演説の東條を「鉄石の言葉をもった歴史的な演説」と表現した。また、「”残留者は死の覚悟”」（『朝日新聞』昭和 16 年 11 月 18 日）では、鉄石の決意をもった東條の熱烈な激励の辞に沸き立つ民衆が強調されて報道されている。

48「また新語　絶対必勝　“東條演説”一節毎に拍手」（『朝日新聞』昭和 17 年 3 月 13 日）

49「“東條さん萬歳”大阪で大群衆が熱狂の嵐」（『朝日新聞』昭和 17 年 7 月 28 日）

50 例えば、日比谷公園で行われた防空精神強化大講演会に駆けつけて演説をした東條を取り上げて「首相、馳参じて獅子吼」（『朝日新聞』昭和 16 年 12 月 17 日）とした報道が代表的な一例である（「来らざるを恃むな　首相、馳参じて獅子吼」『朝日新聞』昭和 16 年 12 月 17 日）。また、病気明けに復帰してきた東條が如何に元気かをアピールする際や（「病を押し敢然登院　議政壇上に獅子吼」『朝日新聞』昭和 18 年 1 月 29 日）、昭和 17 年 11 月 26 日に翼賛会が主催した難局突破講演会で演説する東條を「壇上で獅子吼する東條総裁」と表現するなど（「全国民は戦友愛で生活戦線の困難克服」『朝日新聞』昭和 16 年 11 月 26 日）、多く散見される。

時の指導者像」が強く前面に押し出されているといえよう（図 18 参照）

さて、日米開戦以降、連戦連勝の快進撃を遂げる日本軍の活躍ぶりが連日にわたって報じられたが、とりわけ、昭和 17 年 2 月 15 日のシンガポール陥落は真珠湾攻撃と並んでメディアで大きく取り上げられ、国民も大いに沸き立った。その際、メディアは東條を英雄視する報道をさかんに行った。特に『朝日新聞』や『戦う東條首相』では、シンガポール陥落を祝して萬歳奉唱をする東條とそれに高らかに呼応する聴衆の盛り上がりを写真付きで報道したほか（図 19–21 参照）[51]、「大困難に直面して敢然と戦う大英断の名将軍」と銘打ち、シンガポール陥落を大偉業と称え、日米開戦に踏み切った判断を大英断だと絶賛するものまである。同様に、その偉業は『産戦業之日本』や『メリヤス日本』といった雑誌でも取り上げられ、前者では「首相、中外に歴史的宣言」[52]、後者では「大東亜建設の経倫と抱負」と見出しをつけた上で、表紙には東條の顔写真が掲載され、歴史的快挙を成し遂げた首相として持ち上げられたのである[53]。

しかし、ミッドウェー海戦での大敗を機に緒の勢いに陰りが見え出した昭和 17 年中頃になると、日米開戦前後に見られた、軍服を身に纏い、演説で人々を魅了する戦争指導者としてではなく、神格化された「英雄」として報じられる。その一つが、過去の偉人と東條を照らし合わせ、過去の偉人の威光を東條の威厳の拠り所にする報道であり、その代表的人物が北条時宗である。当時、北条時宗は蒙古という強大な外敵からの侵略に断固として戦った為政者として礼賛され、肯定的に評価されていた。そうした北条時宗の国難に立ち向かう姿勢と強敵アメリカと向き合う東條とを重ね合わせて「昔は北条時宗、今は東條英機」という見出しをつけ、外国からの理不尽な侵略に断固として立ち向かう雄々しい東條のイメージを植え付けたのである[54]。もう一つ特筆すべき人物はナポレオンである。三上知治著「戦ふ東條首相」（小田俊興『戦ふ東條首相』博文館、昭和 18 年、14-15 頁）に記載されている詩の横には、かの有名なルイ・ダヴィッド作『サン・ベルナール峠を越えるナポレオン・ボナパルト』と酷似した構図で馬上からポーズを取る東條の石碑が載せられており、軍神・ナポレオンを彷彿させる紙面づくりとなっている（図 22 参照）。さらに詩にも着目すると、「人類の黎明を築く大使命を負った東條が敵国・米英に立ち向かう凛々しい大将」として描かれており[55]、解放・改革の象徴として描かれやすいナポレオンと東條を重ね合わせているのが覗えるだろう[56]。

こうして北条時宗やナポレオンといった偉人を引き合いに出しながら、いかに東條が戦時の指導者として優れているかを強調したが、それに加え、東條の出自に言及し、軍人としての資質を兼ね備えていることを指摘した。東條は、陸軍教導団の出身で陸軍中将である東條英教を父に持つ、いわゆる軍人二世として有名であり、中将まで出世した英教を「明治建設期の陸軍の礎石である名将軍」と持ち上げて「此の英雄父ありて此の英雄子あり」と述べることで、そうした父の血を受け継ぐ東條が生まれながら

51「首相が高らかに音頭　天皇万歳を奉唱　国挙る陸海軍への感謝」（『朝日新聞』昭和 17 年 2 月 19 日）、高井貞二「シンガポール陥落」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、24-25 頁

52 「首相、中外に歴史的宣言」（『産業之日本』、名古屋経済研究所、16 号、昭和 17 年 3 月）10-11 頁

53 「大東亜建設の経倫と抱負」（『メリヤス日本』、メリヤス日本社、107 号、昭和 17 年 2 月 25 日）1 頁-3 頁

54 前掲、尾関『枢軸の偉人』、21 頁。また、土井晩翠「東條首相に寄す」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、32-33 頁に記載されている「鞠躬尽力　一死を賭して　大敵蒙古を微塵となせし　弘安いにしへ時宗ありき　故人に恥じめや東條首相　世界の眼は皆見詰めり君を」という詩からも、外敵・蒙古を追い払った北条時宗と東條を重ね合わせている様子が覗える。

55 三上知治「戦ふ東條首相」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）14-15 頁

56 軍人出身のナポレオンが王政を立ち上げた後、ヨーロッパ各地へ遠征し領土を拡大した際に各国の領土性や農奴制を打破し、行政・司法といった礎を根付かせたことから、しばしば解放・改革の象徴として描かれることがある。

にして軍人指導者としての才能を持っていることを示唆した[57]。また、尾関岩二『東條英機大将』では東條の幼少期に目が向けられ、厳格な軍人将軍・東條英教のもとで厳しく育つ東條少年や、決して秀才とはいえない東條少年が持ち前の努力家を発揮して現在の地位まで上り詰めたことが描かれており、努力の将軍として東條讃美を貫いたのである[58]。

以上のように、戦時のリーダーとしての東條は、しかめ面で融通の利かない頑固者、悪く言えば冷酷無比で独断専行的なイメージで捉えられた従来のイメージとは異なり、言葉で人々を魅了するカリスマ性を生まれながらに兼ね備え、対米英戦争を勝利に導くリーダーシップを発揮する人物として報じられた。しかし、次章で論じるように、戦局の悪化と共に昭和 18 年 5 月頃から東條の伝え方に変化が生じることになる。

第三章　東南アジア外交で求心力回復を目論む東條

これまで首相就任時から昭和 18 年前半までの東條のメディアパフォーマンスについて考察を加え、そこから浮かび上がる当時の対照的な東條像を明らかにしたが、次第に戦局が日本不利の方向へ傾くと、それが東條をめぐる報道の仕方にも少なからず影響を及ぼすことになる。本章では、昭和 18 年 4 月以降から内閣総辞職に追い込まれた昭和 19 年 7 月頃までのメディア報道について、主に、東條の東南アジア訪問に焦点を当てながら分析し、メディア演出の変化を明らかにしたい。

太平洋戦争勃発から約 1 年にわたり、日本はアジア太平洋に戦域を広げて米英と互角以上の戦いを演じていたが、昭和 18 年に入ると、ガダルカナル島からの日本軍撤退（2 月）、山本五十六の戦死（4 月）、アッツ島日本軍守備隊の玉砕（5 月）といった具合に、日本が苦戦を強いられる場面が増え、以後、その傾向はますます強まった。

そうした戦況の変化に伴い、東條をめぐるメディアの取り上げられ方も一変する。大きく変わったのが、国民を統率する指導者としての東條の扱いである。依然として、持ち前の「実行力」や「至誠努力」を報じる姿勢を堅持することで自身を偉大な戦争指導者としてアピールすることはあったものの[59]、徐々にそうした報道は少なくなった。前章で述べたように、開戦前後は議員や国民を前に演説をふるう場面が多くあったが、そのような機会も減ったため、壇上で「烈火の如く獅子吼する」東條はメディア上からめっきりと姿を消した。仮に、記事で東條の演説が取り上げられたとしても、以前のような「鉄石の決意」・「獅子吼する」といった猛々しい言の数々や聴衆の割れんばかりの喝采が伴った報道姿勢とは打って変わり、会の盛り上がりを大々的に取り上げることはなくなった[60]。従来の「東條演説に熱狂

---

[57] 近藤保雄『偉人と英傑立志伝』（日本神社、昭和 17 年）、39-43 頁

[58] 前掲、尾関『枢軸の偉人』1-7 頁

[59] 「東條さん、工場へ　暑熱に挑む戦士を激励」（『朝日新聞』昭和 18 年 7 月 28 日）では、深川区白河町にある新田製作東京工場を電撃視察し、流れる汗水をハンカチで拭いながら熱心に視察する東條が、「傾聴する東條さん」（『朝日新聞』昭和 18 年 4 月 23 日）では帝大総長会議に出席し大学教育の今後について熱心に意見交換をする東條が報じられており、その勉強熱心な様子からは垂範実行する偉大なリーダー像が覗える。同様に、忠魂碑を依頼した農村のために寸暇をぬって立派な題字を贈った記事である「東条さんの題字」（『朝日新聞』昭和 18 年 5 月 6 日）や、マニラ訪問の際に発した「近々、日本から名医を送ります」の約束通りすぐに比島派遣の医者を内定させた「比島派遣の医者決る　東條さんの約束早くも実現」（『朝日新聞』昭和 18 年 7 月 18 日）からは、約束は必ず果たす東條の「実行力」が前面に押し出されている

[60] 「翼政鉄火の敢闘へ進発　きょう臨時議会へ勢揃い／国民生活の実相把握　断乎戦い抜かん　阿部総裁、全会員を激励　阿部総裁演説要旨／牢固たる決意　首相翼政総会で挨拶　東条首相挨拶要旨」（『朝日新聞』昭和 18 年 6 月 5 日)は大政翼賛政治会での阿部信行総裁、並びに東條首相の演説・挨拶を掲載した記事であり、挨拶を行う東條の様子を写真付きで報道しているものの、それに呼応する聴衆の盛り上がりや拍手とい

する聴衆」の様子はおろか、以前は多分に駆使されていた写真の掲載も見受けられなった淡白な報道姿勢からは、戦局の悪化から威風堂々と振る舞えなくなっている東條の自信喪失が表れていると同時に、東條に対する国民の冷めきった態度が覗える。

また、第一章で論じた大衆政治家としての東條の扱いについても変化が生じる。「壇上から降り立ち、一人一人に“ごくろうさま”と労う」様子を報じた『朝日新聞』（昭和 18 年 5 月 26 日）の記事が掲載された後、国民と仲睦まじく接する「ほがらかな東條さん」について言及されることはあったが[61]、開戦前後の紙面上で頻繁に見られた、ニコニコ顔で道往く国民に温情を与える「人情首相」の登場機会は減少し[62]、国民へ優しい労いをかける東條の姿やそれに心を打たれる民衆の様子が描写されなくなった[63]。以前は、東條がひょっこりと訪れるだけで熱狂と感激の渦に包まれていた電撃視察であったが、そういった視察をめぐる報道も事実関係を伝える淡泊なものとなり、東條と国民との軋轢が強く印象づけられる。

以上のように、東條をめぐるメディアの扱いが大きく変わった背景には、戦局の悪化に伴い、政府・軍部双方のトップとして戦争指導を担ってきた東條への風当たりが強くなったことが挙げられる[64]。公には東條批判は見受けられないが、そうした論調が検閲の段階で厳しくチェックされていたことは「此二つの問題を病床の東條さんに贈る」（『日米開戦の鍵を開く』）〈秀文閣書房、昭和 18 年〉）、「病床の東條さんに申しあげる」（『日米開戦の鍵を開く』秀文閣書房、昭和 18 年）からも容易に想像がつき[65]、水

ったパフォーマンスの類は描かれていない。

[61] 北原白秋「東條さん」（『大東亜戦争　少国民詩集』昭和 18 年、朝日新聞社）では、町中に突如姿を現わした馬上の東條と国民との仲睦まじい情景を想い浮かばせる詩であり、「ゲエトル宰相気楽だな」・「みんなの宰相ほがらかだ」といった親しみやすいフレーズを多用している。さらに、曲がり角で少年少女に声をかけた東條が馬から躓く場面からは、人情首相ならではの親しみやすさを強調している。また、新田潤「祭の夜の東條さん」（『耳目の散歩』、昭和 18 年、東和出版社）では、初夏の宵を一家楽しく散策のひと時を過ごす東條の様子が描かれているが、その中で「いつの時代の総理大臣が、このようにこんな時間にこんな場所を、身辺を護る一人の警官や用心棒もなしにのびのびと歩けただろうか。こんな真似は国民に対する絶対の信頼と、自己の信念に対する絶対の自信ある政治家でなくては、やっぱり出来かねることに違いないとも思った。」と語られており、東條による国民への信頼度と距離感の近さをアピールしている。

[62] 東條さんも激励　お米戦士有難う」（『朝日新聞』昭和 18 年 5 月 26 日）では、高い米収わざわざ壇上から降りて一人一人に労う「大衆政治家パフォーマンス」が描かれ、「御楯学徒を激励　神宮参拝の東條さん」（『朝日新聞』昭和 18 年 11 月 20 日）でも同様に一人一人に微笑みと労いの言葉を与える人情首相・東條が報じられているが、以前のような感激の盛り上がりはない。

[63] 「東條さん　発明展を奇襲“勝ち抜く科学”へこの親心」（『朝日新聞』昭和 18 年 10 月 12 日）では、従来であれば紙面上で頻繁に散見された「元気でやっているか」などと優しい言葉をかける東條の描写はまったくみられない。

[64] 清澤の日記には東條の不人気ぶりが綴られており、例えば、東條に関する怪文書が出回って「東條に対する反感が、可なり各方面に瀰漫している」ことや、「東條攻撃の手紙が、一日、二百通も行ったことがある、という話しもある」ことなどを挙げ、東條内閣に対して国民の不満が強かったことを清澤が記している（清澤洌『暗黒日記』昭和 19 年 3 月 23 日、10 月 20 日）

[65] 野依秀市「病床の東條さんに申しあげる」（『日米開戦の鍵を開く』秀文閣書房、昭和 18 年）、233-241 頁は、東條を日本の英雄児であると評価し、「今更改めて静思などする必要もなければ、新たな構想も決心も必要ないかもしれないが」と前置きした上で、「思い切った画期的の、なんというか、私には言葉に現わせないが、もっと他の方面に画期的の断行がなされて一層の御苦労をお願い申さずにはいられない。」と結論を濁した言い方ではあるが、現状の東條内閣に苦言を呈した。「此二つの問題を病床の東條さんに贈る」（『日米開戦の鍵を開く』秀文閣書房、昭和 18 年）233-241 頁でも同様に、東條を英雄視したうえで、「東条さんの過去における様々な熱烈なる切羽詰まったお言葉を覗っていると、我々が何も上げる必要もなく、改めて病気を機会に考えなさる必要もないかもしれないが」と前置きしたうえで生産増強の貫徹について注文をつけている。そして、「我々のような野人で相当な意見をもち且つ何ものにも捉われずに、国家本位に談ずることの出来るもの数名と、一週間に一回くらいは日を決めて会見することが必要ではないだろうか。遠慮なく物を言い得る者と会談されることが非常に必要なのではあるまいか。」という提言から、表だった東條批判ができな

面下では東條内閣への不満が国民の間に広まっていたといえる[66]。東條内閣への不信感や従来のパフォーマンスを行うに足る十分な功績が伴っていないことが、昭和 18 年 4 月以降のメディアパフォーマンス低下を助長している要因であることは間違いないだろう。

さて、以前のようなメディアでの演出がやりにくくなった東條が、国内での東條人気低下を食い止めるべく、新たに活路を見出したのが東南アジア歴訪であり、国内に向けて日本が東南アジアを掌握しており、自らにその力があることをしきりにアピールした。実際、東條は、昭和 18 年 3 月以降、南京や満州国への訪問を皮切りに、日本軍の占領地である東南アジアにも足を運んでいる[67]。特に、昭和 18 年 5 月にフィリピンを訪問した際には、現地での熱烈歓迎ぶりが大々的に報じられた。例えば、『東條首相、比島を訪問」(『写真週報』272 号）では、東條を一目見ようと訪れた現地の民衆と日本国旗で埋め尽くされているフィリピンの演説会場を写真付きで伝え、「比島感謝大会に集まった比島民衆はその耳朶にはっきりと聴いた。烈々たる東條総理の一言一句を通して盟主たる日本の偉大さと指導者の正義を」という演説の一部を紹介しながら、東條の健在ぶりをアピールした[68]。また、現地での東條のふるまいについても言及されており、負傷兵士には「どこで負傷した、傷は痛むか」と慈愛に溢れた慰問の言葉をかけ、警察官訓練所では「銃の持ち方がちがうようだね」と訓練生の一人一人に近づき手を取って熱心に教え込み、現地小学校の授業風景を「慈父のように和やかに」見守るなど、民情視察での人情首相ぶりが盛んに報じられている（図 23-25 参照）[69]。コレヒドール陥落記念式典を取り上げた『朝日新聞』でも、随行者も携えずに悠々と散歩をする東條が式に集まる在留邦人に一々「ヤア」と挨拶をする姿が紙面を飾り、開戦前後、新聞を賑わした東條の大衆散歩がフィリピンで復活する格好となった[70]。

その後、東條首相は六月末から約二週間にわたって東南アジアの各地を訪問したが、ここでも、現地での歓迎ぶりや東條の大衆政治家としてのふるまいが大きく取り上げられた。ジャカルタでの民衆感謝大会をめぐる報道では、「歓喜ここに爆誕　ジャワ廿萬民衆の感謝大会」の見出しをつけ、熱烈な眼差しと満場の拍手をもって東條を称える聴衆の様子が描かれ[71]、別の記事では、「まるで父親のような慈愛に満ちたやさしさ」に感激した現地の人の話が紹介されており[72]、現地の人達からも慕われている大衆

い言論空間であると読み取ることができる。

66 「続く飛入り発言に東条さんも一席　活溌な戦時生活論」(『朝日新聞』昭和 18 年 7 月 16 日）では、日本産業経済新聞主筆の小汀利得が「些細な問題で心を暗くしたり神経を使うのはよくない。東條さんが相撲を見に行ったからといって非難をするようなことは止めたい。国民はもっと剛健な心をもつようにし、東條さんも暇があったら大いに相撲でも見に行って元気を養って頂きたい。」と東條擁護論が展開された。つまり、そうした記事が出るほど、東條に対する国民の不満が燻っていたのである。

67 「東條首相、南京を訪問」(『写真週報』、昭和 18 年 3 月 31 日、265 号）3 頁、「東條総理　満州国を訪問」(『写真週報』、昭和 18 年 4 月 14 日、267 号）3 頁では、各国首相との固い握手の様子を大々的に報じている。

68 東條の演説に対する感想が満洲国・タイ・フィリピンなどから集められ、それが新聞やラジオで大々的に取り上げられていることについて、清澤は「こうした子供らしい自己満足が、世界をして日本を侮辱させることになるのだ」と痛烈に批判した（清澤『暗黒日記』昭和 18 年 6 月 17 日）

69 『東條首相、比島を訪問」(『写真週報』272 号)、「東条さん比島のヨイコの勉強を視察」(『朝日新聞』昭和 18 年 5 月 8 日）でも同様に比島島民の授業風景を優しく見守る東條の様子が報じられていた

70 「感慨も深き激励　かなたに浮ぶコ島を望みつつ　東条さん陥落記念式へ」(『朝日新聞』昭和 18 年 5 月 8 日)。

71「歓喜ここに爆誕　ジャワ廿萬民衆の感謝大会」(『朝日新聞』昭和 18 年 7 月 13 日）にて、壇上から降りて整然と並ぶ民衆の最前列近くまで歩み寄り、微笑を浮かべて挙手の礼を行いつつ、端から端へと悠々と歩を運ぶ東條のパフォーマンスに、感激が爆発する民衆の様子が描かれている。

72 「“東条さん”に感激　米英撃滅へ邁進　張切る昭南の現地人」(『朝日新聞』昭和 18 年 7 月 7 日）では、昭南を来訪した東條の印象を語る現地人を記事にしたものである。はじめて日本の宰相に接した感動も生々しく述べた三人は、東條の「見た目よりずっと親切で温かみのある人柄」に感激を覚え、大日本帝国への忠

政治家・東條というイメージが植え付けられたのである（図 26–27 参照）

ここまで、東南アジアへの外遊をめぐる一連の報道と東條の扱いについて論じ、東條が大衆政治家・戦争指導者としての力があることを内外に示し、求心力の回復を目指したことを明らかにしたが、それをより一層確実なものにすべく、東條が旗振り役となったのが昭和 18 年 11 月の大東亜会議開催である[73]。5 頁にわたり大東亜会議の様子を大々的に報じている「アジア十億の戦力結集　大東亜会議開く」（『写真週報』昭和 18 年 11 月 17 日、298 号、3－7 頁）では、大東亜の指導者として東條をこの上なく強調している数々の写真が見受けられる。東條を中央に据え、両側にアジア諸国の政治指導者が居並ぶ集合写真、各首脳と親しく懇談する東條の写真、そして、大東亜結集国民大会場で「烈火を吐く」東條に熱い眼差しを送る各首脳の切り抜き写真などが掲載されており（図 28–29 参照）、アジア各国をまとめあげる「大東亜の盟主」としての東條が何度も紙面に登場するメディア手法からは、その姿を国民の目に焼きつけようとした意図が強く受け取れる。大東亜の威厳ある指導者の地位に再び返り咲き、大東亜会議ではアジア各国をまとめあげる中心人物として「東亜の盟主」ぶりが遺憾なく発揮している東條が多分に描かれている。

以上から、活動の場を海外に移し、アジア占領地で「大衆政治家像」を押し出すことで東南アジア諸国民の民心掌握に徹した結果、「アジアの父」としての地位を盤石にし、「東亜の盟主」として再び自身を権威づけることに成功した見事なメディアパフォーマンスであったといえよう。しかし、メディアへの露出を通じて、大衆政治家・戦争指導者としてアピールする東條の取り組みはさらなる戦局の悪化でその意味を失うことになる。昭和 19 年 6 月のマリアナ沖海戦と同年 7 月のサイパン島をめぐる戦いで日本は敗北を喫し、東條が自ら設定した絶対国防圏が破られた結果、統帥権を兼職する東條の面目はもはや修復不可能となり、7 月 22 日に内閣総辞職に追いこまれた。その後、終戦まで東條がメディアに露出することはほとんど無かったが、戦後は「東條さん」や「東亜の盟主」ともてはやされていた頃が忘れさられたかのように東條はマスメディアに厳しく批判されたのである。

結論

太平洋戦争という未曽有の大戦争は、日本にとって大きな転換期を迎えることとなった。敗戦という経験は、奇しくも日本を高度成長に導いたと同時に、苦い楔として今もなお日本人の心に深く根付いている。それでもなお、天皇を中心とする皇室制度が戦後も存続し続けているのは、言うなれば敗戦の責任を背負った数々の政治家の影があったからといえよう。その第一人者といえるべき人物が、本論文で取り扱った東條英機であろう。戦争指導者として日本人の記憶の奥底に強く残り続け、戦後 70 年を過ぎた今でも、その負のイメージが深く根付いているが、東條が首相として在職していた戦時中のメディア、例えば、『写真週報』のような政府刊行誌にとどまらず、全国紙である『朝日新聞』、『婦人之友』や『幼年倶楽部』といった大衆向けの雑誌を分析していくと、新たな東條の姿が浮かび上がる。

本論文で明らかにした東條英機は、あるときは軍服姿で猛々しく演説をする凛々しい軍人であり、ま

誠をさらに固いものにした。

[73] 大東亜会議とは、昭和 18 年 11 月 5 日 - 11 月 6 日に東京で開催された、大東亜共栄圏に属する国々の指導者達が集った会議である。参加国は日本、中華民国国民政府、満州国、フィリピン共和国、ビルマ国、タイ王国、そしてオブサーバーとしてインドの計 7 国であり、当時の日本の同盟国や、日本が旧宗主国を放逐したことにより独立を認められたアジア諸国の政治指導者達を招請した。

たあるときは浴衣姿で子供と仲良く朝の散歩をする好好爺といった具合に、メディア上では厳父と慈父の二つの顔を併せ持つ見事なメディアパフォーマンスを仕掛けた。前者は、言葉で人々を魅了するカリスマ性を生まれながらに兼ね備え、対米英戦争を勝利に導くリーダーシップを発揮する人物として、後者からは、陸軍時代の成功体験を生かし、庶民に親しまれ、その生活を誰よりも親身になって理解してくれる指導者であることを国民に広く浸透させようとしたのである。こうした生き生きとした二つの東條像は、シンガポール陥落までメディア上で頻繁に姿を現すものの、戦局の悪化に伴って目立たなくなり、それに代わって、戦争指導者としての威光を高めるための様々な報道が繰り広げられる。あるときは過去の偉人の威光を東條の威厳の拠り所にし、またあるあら時は東南アジア諸国来訪を通して諸外国の円滑な統治をアピールし、実に多様な手法で巻き返しを図り、大東亜会議を前面に押し出すことにより一時期は威厳を取り戻したかのように見えた。しかし、そうした努力の甲斐もなく、昭和 19 年 6 月のマリアナ沖海戦や同年 7 月のサイパン島での敗戦が致命傷となり、7 月 22 日、東条内閣は総辞職に追い込まれた。その後、東條は終戦までメディアに露出することはほとんど無かったが、戦後、自殺未遂騒動や東京裁判でメディアを賑わせ、戦争責任を厳しく追及されたのである。

以上の分析から垣間見えるのは、多様なメディアを駆使しながら円滑な戦争指導を担っていた東條英機の新たな一面である。東條のメディア演出が成功と言えたかどうかは疑問がつく問題であり、組閣当初からそうした演出に冷ややかな目線を送る世論も少なからず存在していたものの[74]、「大衆政治家像」と「戦争指導者像」というまさに正反対といっても過言ではない二つのイメージを使い分けた巧みなイメージ戦略を行う東條は、現代ではあまり認知されていないイメージではないだろうか。当時、メディア戦略という手法は未だに普及はされておらず、陸軍出身者という点からも本論で論じた東條像の意義は大きいのではなかろうか。

[74] 清澤は日記の中で「朝から晩まで演説、訪問、街頭慰問をして五六人分の仕事をしている」東條に対する国民の評判が良いことを指摘しつつも、「総理大臣の最高任務として、そういうことを国民が要求している証拠だ」と述べ、大衆政治家としてふるまう東條を歓迎する国民やそれを持ち上げるメディアに対して苦言を呈した（清澤『暗黒日記』昭和 17 年 12 月 9 日）。また、同日記内で、怪文書が出回るほど東條内閣への反感が高まっていることに言及し、帝大教授の辰野隆も「東條首相というのは中学生ぐらいの頭脳だ」と吐き捨てている。

図 1　市中に向かう馬上の東條

『写真週報』（昭和 16 年 11 月 12 日、194 号）

図 2　大衆散歩を行う東條の絵

多々羅義雄「春の会話」（小田俊興『戦ふ東條首相』昭和 18 年、博文館、46 頁-47 頁）

図 3（左）　炭抗の民情視察に作業服で臨む東條
『写真週報』（昭和 17 年 4 月 15 日、216 号）、3 頁
図 4（右）　電撃視察を行う東條
「五十八ぢゃまだ若い　職業戦士を励ます東條さん　帰路にお米屋も奇襲」
（『朝日新聞』昭和 17 年 6 月 12 日）

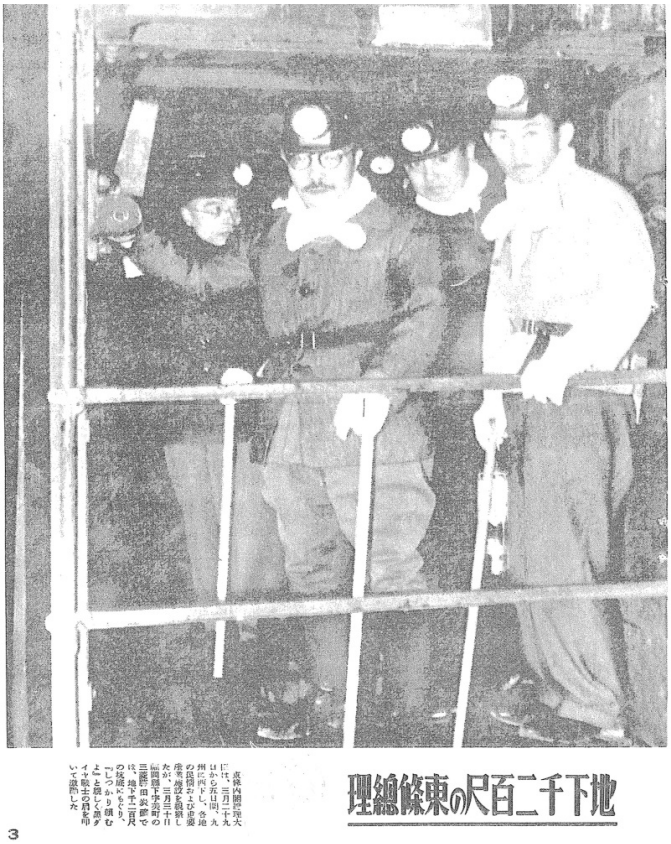


図 5　奈良で兵の射撃練習を自ら指導する東條
「東條さん暁の奈良で民情視察　日曜日くらいは朝風呂を　兵の射撃演習を自ら指導」
（『朝日新聞』昭和 17 年 8 月 23 日）

図 6　首相官邸で画伯を労う東條

「書壇の巨匠を招く　東條さん慰労の清談」（『朝日新聞』昭和 17 年 10 月 8 日）

書壇の巨匠を招く

東條さん慰労の清談

図 7　朝鮮農業報国隊を激励し、その後、首相官邸で労う東條

「生かせ内地で鍛えた腕」（『朝日新聞』昭和 17 年 7 月 7 日）

腕たへ鍛で地内せか生

勵激を隊國報業農鮮朝·んさ條東

図 8　東條の温かい計らいに喜ぶ民衆とにこやかに微笑む東條
『写真週報』（236 号、1942 年 9 月 2 日）18-19 頁

図 9　『子供之友』に記載されている「少国民ノミナサンヘ」
「大東亜戦争一周年ヲムカエルニアタッテ　少国民ノミナサンヘ」（『子供之友』）

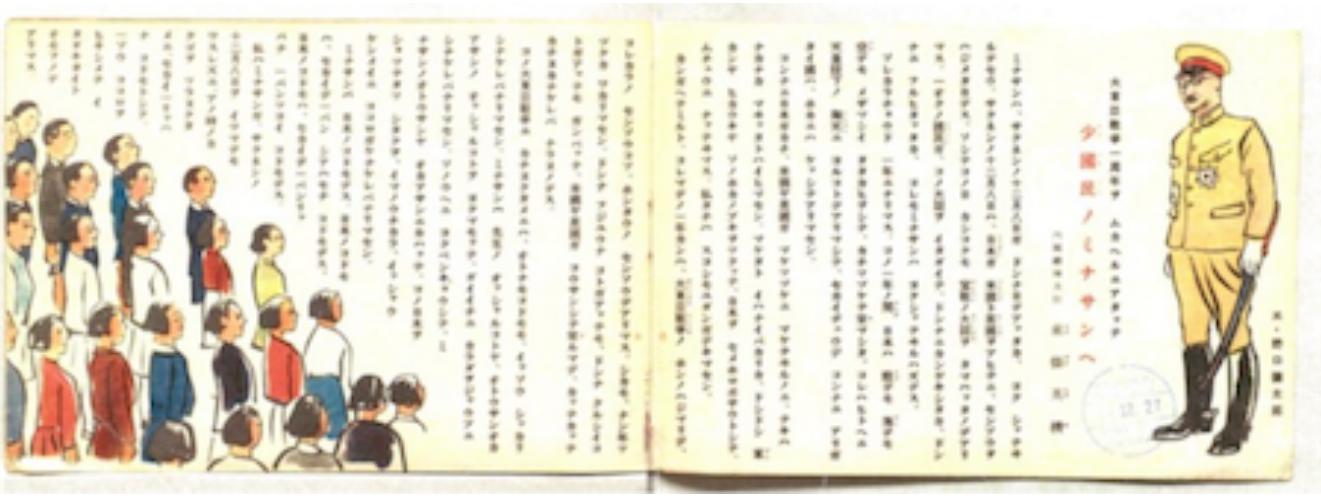


図 10　学童代表と共に萬歳をする東條

「臺を降りて君が代合唱　東條さん全国学童代表に訓示」（『朝日新聞』昭和 17 年 9 月 23 日）

學童代表と共に萬歳を奉唱するとうじょうさん

図 11（左）　和服姿で子供と散歩を振る“ほがらか”東條

「頷く無言の東條さん　軍神岩佐中佐の遺宅を訪ふ」（『朝日新聞』、昭和 17 年 8 月 6 日）

図 12（右）　遺児を優しく励ます東條首相

「英霊に応えよ」（『朝日新聞』昭和 18 年 3 月 7 日）

子供の手をひき散歩するとうじょうさん

額く無言の東條さん

軍神岩佐中佐の遺宅を訪ふ

相首條東すまげはくし優を兒遺

図 13　急病の遺児のもとに駆けつける馬上の東條

「東條さん　馬上から視閲」（『朝日新聞』昭和 17 年 3 月 28 日）

東條さん

馬上から視閲

急病の遺兒をお見舞ひ

隊部兒遺の激感し拜奉に前城宮を簿函の幸行

相首條東ふ舞見を兒遺たれさ容收に車護救で病急に前を拜奉は(下)

図 14　軍服に数多くの紋章をぶら下げた東條

「大東亜戦争一周年」（『写真週報』249 号、昭和 17 年 12 月 2 日）

図 16　馬上の東條が描かれた詩集

三上智治「敬神」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、10-11 頁

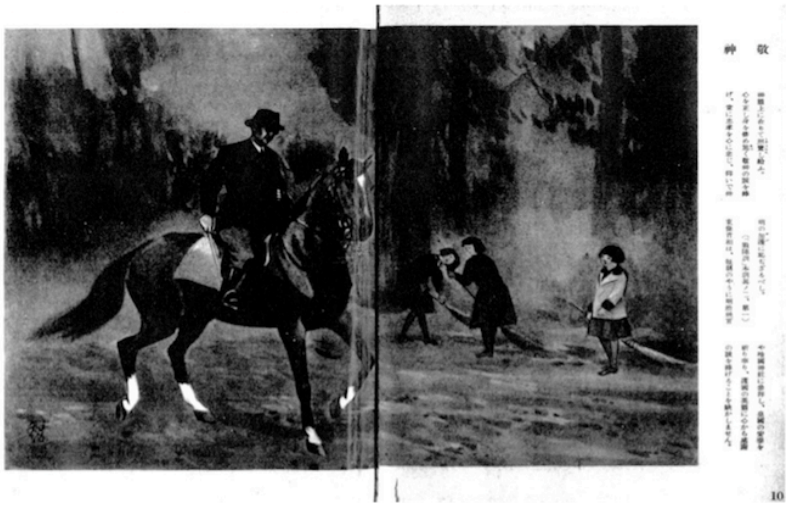


図 15　『写真週報』の表紙を飾る馬上の東條

『写真週報』（215 号、昭和 17 年 4 月 8 日）、1 頁

図 17　東條演説に熱狂する民衆と沸き立つ会場

「“東條さん萬歳”大阪で大群衆が熱狂の嵐」（『朝日新聞』昭和 17 年 7 月 28 日）

図 18　壇上で凛々しく吼える東條首相

「首相の決意・我等も実践」（『朝日新聞』、1942 年 12 月 9 日）

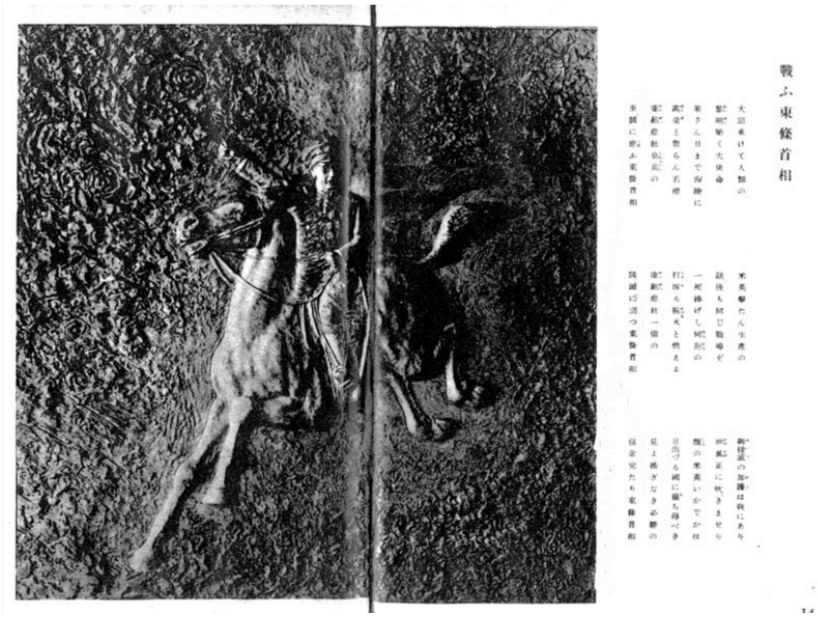
図 19　シンガポール陥落を祝し、首相官邸前で万歳三唱を唱える少国民
高井貞二「シンガポール陥落」（前掲、小田『戦ふ東條首相』）、24-25 頁

図 20　シンガポール陥落を祝し、万歳三唱を唱える東條と民衆
「白堊どよもす萬歳」（『朝日新聞』、昭和 17 年 2 月 17 日）

図 21　宮城に集まり、シンガポール陷落を祝う民衆
「宮城前に“御民われ”世紀の萬歳」（『朝日新聞』、昭和 17 年 2 月 17 日）

図 22　ナポレオンを彷彿とする東條石碑

三上知治著「戦ふ東條首相」（小田俊興『戦ふ東條首相』博文館、昭和 18 年、14-15 頁）



戰ふ東條首相

図 23　比島兵士に銃の扱い方を教える東條（上）と東條来訪に感激する比島島民（下）

『東條首相、比島を訪問』（『写真週報』272 号）

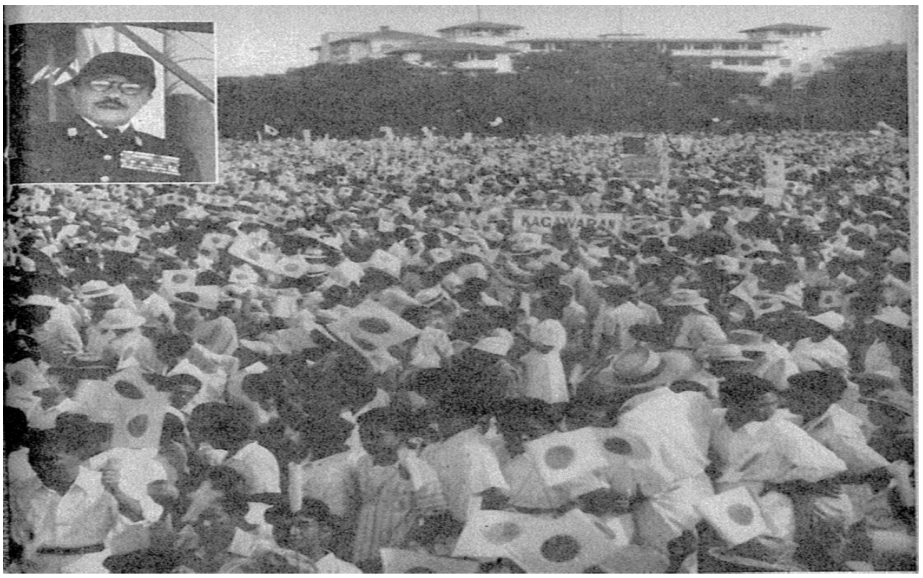


図 24　東條の来訪に感激する比島市民

「友情の微笑に泣く　至誠こそこの人へ最善の餞け」（『朝日新聞』、昭和 18 年 5 月 7 日）

東條閣下を迎へ比島人の感激

人島比る語を象印のんさ條東

友情の微笑に泣く

至誠こそこの人へ最善の餞け

民スガルバ

図 25　比島の国民学校を訪れる東條

「東条さん比島のヨイコの勉強を視察」（『朝日新聞』昭和 18 年 5 月 8 日）

東條さんの比島「ヨイコ」の勉強を視察

図 26　東條来訪に歓喜するジャワ市民

「東條首相南方視察の二週間」（『写真週報』、1943 年 7 月 21 日、281 号）3 頁

東條首相南方視察の二週間

ジャカルタ

図 27　ジャワ島で民情視察を行う東條

「東條首相南方視察の二週間」（『写真週報』、1943 年 7 月 21 日、281 号）4 頁

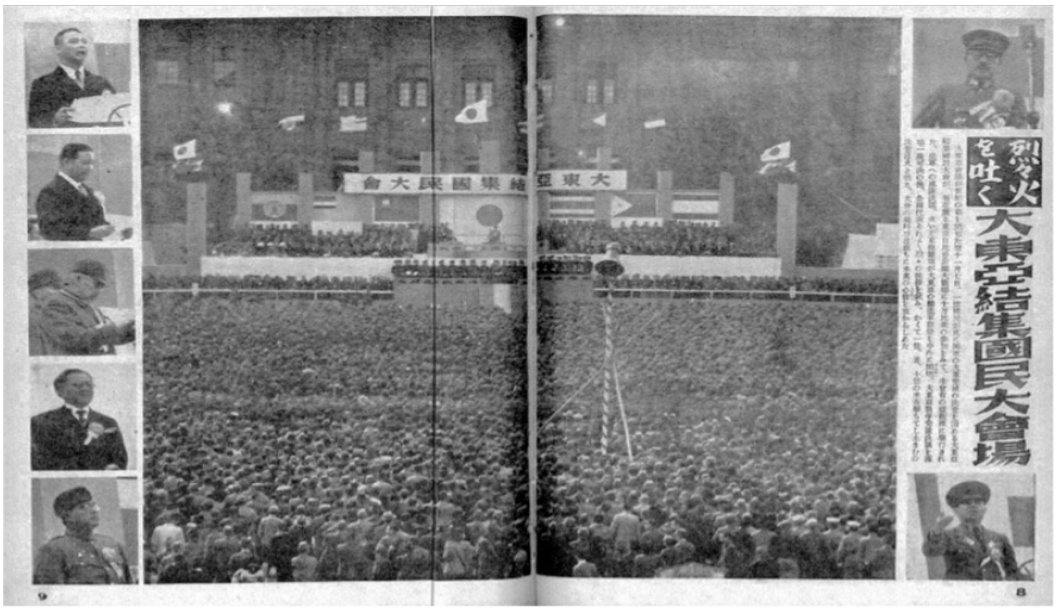
図 28　東條を中央に据え、両側にアジア諸国の政治指導者が居並ぶ集合写真

「アジア十億の戦力結集　大東亜会議開く」（『写真週報』昭和 18 年 11 月 17 日、298 号、3 頁）

アジア十億の戰力結集

大東亞會議開く

大東亞共同宣言

図 29　大東亜結集国民大会場にて熱弁する東條とそれを見つめる各首脳陣

「アジア十億の戦力結集　大東亜会議開く」（『写真週報』昭和 18 年 11 月 17 日、298 号、8－9 頁）